

【書評】

渥美公秀・稲場圭信 編『助ける』（2019 大阪大学出版会）

山口 洋典（立命館大学）

YAMAGUCHI Hironori (Ritsumeikan University)

副題もなく、ただ動詞だけの、見方によっては珍妙なタイトルである。本書は大阪大学人間科学部の教員らによる「人間科学部設立当時からある『人間科学とは何ですか？』という疑問への現時点における私たちからの回答の一つ」(p.i)として刊行の運びとなった「シリーズ人間科学」の1冊である。これは2018年3月に「食べる」に始まったシリーズで、本書はその2巻目として2019年3月に3巻目の「感じる」とあわせて発刊となった。その後、2020年には「学ぶ・教える」と「病む」が、2021年3月には「越える・超える」が、2022年3月には「争う」が、相次いで刊行され、今後も大阪大学出版会から「人の『こころ』と『からだ』と『くらし』を表すタイトルを持つ続刊の刊行を予定」(p.ii)と記されている。

「人間科学とは何ですか？」という疑問に、動詞で答えていくというシリーズの編集方針に、答えを出すことよりも問いを深めていくことへの覚悟を見てとることができる。動詞に着目することにより、行為の主体である人間の営みだけでなく、その行為の対象となる人・もの・出来事との関係性に対しても、その意味を探究する手がかりとなるためだ。事実、本書の「まえがき」には、「助ける」という動詞にかかわって、次のように行為の意味を吟味している箇所がある。少々長くなるが、以下に引用する。

少子高齢、過疎、災害の頻発、子どもの貧困などさまざまな難題を抱える現在の社会にあって、同時代的に、さらには世代を超えて、誰もが人間としての尊厳を持ち、支え合い、さまざまな困難に共に立ち向かえるレジリエントな共生社会の構築が望まれている。そこでは、「助ける／助けられる」という関係性と、その関係性の元で「助かった」という経験への理解も必要だ。さらには、「助けられない／助からない」ことへの心配りも忘れてはならない。(p.iii)

当然のことながら、行為には目的があり、結果がつきまとう。望ましい結果が得られたとき、結果は成果として受け止められ、予想を超えた成果がもたらされたときには成功として位置づけられる。ただし、本書のテーマ「助ける」については、目的の設定、結果に対する成果の意味づけ、そして一連の行為のプロセスに対する成功や失敗とする評価において、前掲の引用

箇所では記されたとおり、助ける主体と助けられる対象とのあいだの理解や心配りが欠かせない。言い換えれば「助ける」という行為においては、助ける側の助けたいという願いと、助けられる側の助かったという思いをどうつなぐか、という問いが深く根ざしている。

ここで本書が「シリーズ人間科学」の1つであることに着目すれば、果たして「助ける」とはどういう営みかという単純だが奥深い問いに答えるのみならず、その答えを通して人間科学とは何かについての答えも提示することが本書では企図されている。そうした企図に向き合ったのが11人の研究者である。11人が1章ずつを担当し、哲学、社会人類学、宗教社会学、医療社会学、教育社会学、開発人類学、認知心理学、比較行動学、臨床心理学、現象学、共生学と、それぞれの専門から「助ける」について論じられている。換言すれば、メゾレベルの専門から、メタレベルの専門としての人間科学に接近していく、という構図となっている。

いささか論から逸脱することを承知の上で記させていただくなら、書評が学術雑誌の投稿種別の一つに位置づけられているのは、よくできた本ほど評者に試練を与えてくれる、ということもまた本書は教えてくれるだろう。何より、まえがきが秀逸な書籍内書評になっているためである。近年、例えば鳥取県智頭町での長きにわたる地域おこし・事おこしをまとめた書籍（寺谷ら 2015）の中に、その実践の伴走者となってきた研究者（岡田憲夫・京都大学名誉教授）による「本書の中の本の書評」が収められるという巧妙な事例もある。ただ、複数の編者・執筆者によって大きなテーマがリレー形式で綴られていく上で、次のように「はじめに」で記されると、書（book）を評（review）する者に求められる水準は極めて高いものとなる。

第1部「助ける」のフィロソフィーでは、助けること・助けないことについて哲学、人類学、宗教社会学からの議論を提供する。続いて第2部「助ける」のフィールドでは、差別、ジェンダー、国際協力など多様な場面での助ける行為の実際をフィールドワークから伝える。第3部「助ける」のサイエンスでは、助ける行為を、人々の安全行為、霊長類の助け合いなどの科学的研究を通して分析した成果を紹介する。最後に、第四部「助ける」のアートでは、

助け方の工夫について、カウンセリング、当事者研究、災害救援などの場面で行われている助け方の工夫を紹介し、「助ける」に関する実践的な展望を拓く。(pp.iv-v)

よって、本書の要約は編者らが記した上掲の記述にて把握いただき、ここでは刊行から2年あまり経った今、つまりコロナ禍以前に刊行された書籍においてコロナ禍後の世界を生きる私たちを「助ける」かのような記述に目を向けてみたい。例えば、内戦による中断を余儀なくされながらも「学問の非中立性に積極的意義を見出し」(p.44) 約40年にわたってスーダンでのフィールドワークを継続してきた経験(第2章)、またサルやコウモリやリスの行動との比較を通じて「求められてもいない援助行動を進んで提供することがヒトの特殊性」(p.182)に迫った調査(第8章)、これらもまた、コロナ禍に引きつけてオンライン会議システムを通じたかわりあいの継続、またエッセンシャルワーカーや貧困・孤立した人々への着目と支援の展開など、多くの示唆が得られるだろう。ただ、今回は書き出しにフランスの小説家アルベール・カミュによる1947年の作品『ペスト』を引用した第1章「助けることの哲学」から、インド＝ヨーロッパ系の言語に見られるという能動態でも受動態でもない「中動態」(國分2017)への着目から、「主語が不明瞭である助けることが、助けるという強い意味での意志を示す言葉に比べて、多くの領域を覆う」(p.11)という部分に着目してみたい。なぜなら、第1章は先に引用した「まえがき」からの引用箇所で触れられた「助ける／助けられる」(関係性)と「助かった」(経験)、さらにはその結果として「助けられない／助からない」ことへの心配りに対し、以下の箇所にあるとおり「行為自身は失敗でも、その行為は誤りなのではない」(p.20)と、他者に向き合うという行為の手続き的な正統性に加えて衝動的な行為の正当性を明快に説明しているからである。

「助ける」ことは「失敗」し続ける。それは「助ける」場面がいかにして生じるかを見れば自明なことである。だが助けることに「失敗」することは、けっして行為としての誤りではない。もちろん成功

でもないかもしれない。結局は誰かが助からないからだ。ペストが終息した世界でも、ペストはどこかで再発すべく潜み続けている。災害やテロなどは、結局はどこでも発生し、いつでも生じ繰り返される。(pp.20-21)

全ての人を助けられなくても、誰かが助かる社会を創造すること、その意味を「助ける」ことの哲学に見出せるならば、それはソーシャル・イノベーションへの発露とも重なる。本書では1972年の設立から約50年にわたり蓄積してきた大阪大学人間科学部の教育・研究を踏まえてシリーズ展開がなされた書籍の1つであるが、折しも2022年3月には同志社大学の人文科学研究所(からシリーズ61冊目となる研究叢書LXI『ソーシャル・イノベーションの理論と実践』が明石書店より刊行された。学会の年次大会を重ねることでネットワークも広がりつつある今、シリーズ「ソーシャル・イノベーション」の刊行も夢ではないかもしれない。例えば「つながる」という動詞を掲げた巻では、つながる、つなげる、つながった実践から、世直しと人助けの理論と哲学を検討できそうだ。

末筆ながら、本書の編集は、評者の恩師である渥美公秀先生(共生学)と、評者が以前の仕事(浄土宗應典院主幹)を通じて協働の機会を何度か得てきた稲場圭信先生(宗教社会学)である。本書の通読と書評の執筆は、土木工学を専門にしていた評者が、いてもたってもいられずに駆けつけた阪神・淡路大震災でのボランティア活動の意味を探るべく、グループ・ダイナミックスという観点から地域共生について学究し、その後は実践的研究のフィールドとして仏教寺院を拠点の一つとした、自らの歩みを振り返る機会となった。阪神・淡路大震災から15年を迎える折、京都新聞社より取材を受け、「ボランティア元年」を担った元学生「大学教壇から体験語り継ぐ」という記事となったとき、評者の語りに対して「押しつけの善意、善行でない」と要約いただいた。改めて「助ける」という行為が成果をもたらすかは、必然でも偶然でもなく、極めて蓋然的という点を多角的に見つめ直す機会を得た本書に、またその編者・執筆者らの労を多として、謝意を表したい。

引用文献

國分功一郎(2017)『中動態の世界』医学書院

寺谷篤志・平塚伸治・鹿野和彦(2015)『「地方創生」から「地域経営」へ』仕事と暮らしの研究所